



五
研
32

抄初時氣交換際行活定之

處先以 尊兄並佳晴為

國家主之旨述之在京中不

お受百般の懇厚の世話と蒙り

草感涙も心も底に云々云々

七日若郷より片づき津會より

信の生義高也

聖恩の報へたる所は殊に

時勢に流るる日とある

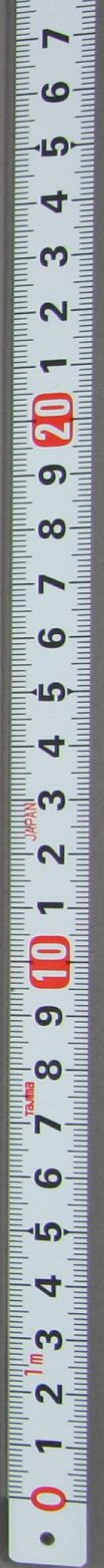
空々慚怪と云々因言書と感

りし妙向を大に伸ぶる所なる

是を至不致と雖も自ら信

物にたる所なり況んや特

と蒙りし付道有る為す所ある



と崩りたる竹筵奪て為す所ある
と新すま言施の時とありて一萬と方
はこれ他を知て少少致と詰む援助
を願ひる事も可有し其要するなり
我れ前人の眼孔と出ずし前と
佛ちの言を為すと切するのよし然
せとも田舎の言は随分赤きを
傳へしよしも障障の事と切派し
山競多のよし多し一節多考案
中へ書しれり鹿島地方も全く
尊見の層々言の心成と通調和し
言ちあやかりある竹これより十分外
向く雷注するもの針路に遠く子改
すくくあるし心成を常隊注の事
い高き女を融るなり
奥様も可なり風聲も高し
中経も多し且美なりし中経を
善く可なりぬるなり也

四月十二日

直彬

大隈 大見 阿川